

ほのぼの News Letter



No.13

一般社団法人 ほのぼの運動協議会



CONTENTS

- | | | | |
|-----------|-------------------|-----------|---------------------|
| 2 | ほのぼの憲章 | 14 | 忘れな草プロジェクト 郡山編 |
| 3 | 理事長あいさつ | 15 | 忘れな草プロジェクト 番外編／収支報告 |
| 4 | 忘れな草プロジェクト 手渡し式 | 18 | 域学交流事業 |
| 6 | 忘れな草プロジェクト 巣鴨編 | 21 | 店舗紹介 |
| 10 | 忘れな草プロジェクト 代々木公園編 | 24 | 第8期事業計画／編集後記 |

ほのぼの運動憲章

—ほのぼのと夢ある社会を実現する運動—

わたしたちは、ほのぼの運動の活動を通じて日本の各地に夢と希望の灯をともし、ほのぼのとしたあたたかい場づくりを目指します。

一. 日本の食文化・農業への思い

からだにやさしい国産の食材を活かし、手づくり、本物づくりにこだわります。
日本ならではの食を通じ、食べた人の心にほのぼのとしたあたたかみを伝えます。

一. 地球環境への思い

住みやすい地球をつくるために、包装・資材などの資源にこだわります。
周辺の人たちと力を合わせて環境美化を心がけ、清潔・清掃を徹底します。

一. 地域コミュニティへの思い

街のほのぼののスペース、「私の街の私のお店」と思っていただけのような店づくりをします。
地域の人たちが安心して喜び集まるような、手のぬくもりが伝わる場づくりをします。

一. 働く意義への思い

売上の一部を社会に還元します。
それによってスタッフみんながはたらく(傍楽)喜びを感じられる店舗運営をします。

一. “ほのぼの”を創りつづける思い

形のない“ほのぼの”だからこそ、お客さま、コミュニティ、仲間、スタッフ、みんなの
“ほのぼの”を追求しつづけます。
“ほのぼの”運動のさらなる浸透・発展を思い描き、真の豊かさを感じ、分け合います。

一. 未来への思い

未来のために、女性の社会進出・シニア世代の活躍など新しい価値観を創造し、挑戦します。
お客さまとお店との絆、同じ地域という絆、家族の絆、働く仲間という絆、多くの絆のな
かから、新しい社会を創造します。

一. 夢への思い

自分自身の夢を育み、仲間の夢を支え、お客さまの夢を大切に、前進します。
「夢は見るものではなく、叶えるもの、そして更に追い求めるもの」との思いをみんなと共
有し、つねに忘れません。

■大河原毅理事長のあいさつ

2014年から始まった忘れな草プロジェクトが今回で6回目の開催となりました。

今回は都内では巣鴨2日、代々木公園2日、東北では郡山で1日開催いたしました。新しく参加してくれたふたば未来学園高校は、福島第一原子力発電所から20キロ圏内にあり、また震災後に開校されたということです。そういった高校とともに、この東日本大震災復興支援活動を行うというのは、また新しい未来へ向けた一歩をとともに踏み出せたのではないかというようにも感じます。

代々木公園でのイベントでは、アイルランドの大使にワスレナグサを手渡すというセレモニーを行います。大使は4代目でいらっしゃいますが、アイルランド本国で「日本に来たら、セントパトリックスデーにはほのぼのの運動からワスレナグサを受け取る」というのを楽しみにされていたそうです。

また巣鴨のとげぬき地蔵では、1年間5円玉を毎日貯めて、365枚を数珠つなぎにつるしてもってきてくださる方がいたりするなど、高校生もたいへん感激していました。私自身都内で開催される4日間、しっかりと朝から最後まで参加し、あらためてチャリティというのはそういうものなのだなあと感じています。

また、域学交流事業も、はじめての冬の開催ということで、これまでとはまた違ったプログラムを経験し、八雲町から具体的な課題もいただき、より充実したものにすることができました。

ほのぼのの運動も、やるべきことを着々とやり、少しずつですが中身もよくなってきている気がします。とはいえ、このほのぼのの運動はたい焼き屋の店舗からはじまっており、その店舗活動がいまだに原点です。仲間もふえつつあり、名古屋や熊本などに仲間ができてきました。そういった日常活動を大事にしたいということで、店舗でのほのぼのの活動についての紹介もしていきたいと思います。

そういったことの中から、また新たなヒントを得て、ご自身の店舗や生活の中にもほのぼのの精神を取り入れていただけたらと思います。





第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 手渡し式

■忘れな草プロジェクトとは

2013年にほのぼの運動協議会のメンバーで東北を訪れ、その現状を見て東日本大震災の復興のため継続的な支援をしていくことを決めました。ほのぼの運動協議会独自の活動をしようということで始まったのが「忘れな草プロジェクト」です。福島産業復興を主な目的に、福島の農業高校生にワスレナグサを苗から育ててもらい、それを東京などでチャリティ配布、同時に募金を募るというものです。

6回目となる今回は、都内で4日、東北で1日の合計5日間のイベントを開催いたしました。磐城農業高校、岩瀬農業高校、会津農林高校に、新たにふたば未来学園高校が加わり、4校で総数6,000鉢のワスレナグサを用意しました。

生徒もボランティアスタッフも、みんなが気持ちをひとつにして行う東日本復興支援プログラム「忘れな草プロジェクト2019 - 笑顔の絆をつなごう -」の模様をお届けします。

■手渡し式①—ふたば未来学園高校

双葉郡には震災前には県立高校が5校あり、震災後は県内外各地に設けたサテライト校で授業を続けていました。しかし、元の校舎での授業再開のめどが立たず、平成27年度からの募集を停止。郡内で開校している高校が存在しない状況が4年間続きました。

そんな中、双葉郡の方々の「双葉の教育の灯を絶やすことなく灯し続けたい」という強い願いと、復興を実現し、先進的な新しい教育を創造しようとする国など関係機関の熱い想い、そして、なにより、



震災後、こどもたちの中に芽生えた、復興をなしとげようとする強固な意志、夢を実現しようとする意欲、新しい価値観、創造性、高い志を礎として、ふたば未来学園は平成 27 年に誕生しました。

「変革者たれ」という建学の精神のもと、「自立」「協働」「創造」を校訓としてこれまでにない独自のカリキュラムを実践されています。普通校でありながら、農業科があるということで、今回、忘れな草プロジェクトに参加してくれました。

福島第一原子力発電所から約 20 キロのところにあるふたば未来学園高校。ワスレナグサは、地域の公共の温室の一角を借りて、そこで栽培されていました。多少小ぶりなものの、厚く青々とした葉が力強く育っていました。校舎はまだ完成していないことから、温室から車で 5 分ほどのところにある広野中学校内で授業は行われていました。まずは、校長室で建学の経緯、精神などお話をうかがいました。

また、同高校には、第 1 回目の忘れな草プロジェクトに磐城農業高校の農場長として参加していただいた酒井先生もいらっしゃり、懐かしい再会を果たすことができました。

手渡し式には、10 名の生徒が参加してくれました。当日は、NHKをはじめ福島の地方局、新聞社などが取材に訪れていましたが、さすがに双葉郡の未来を強く思う生徒たち、しっかりと受け答えをしていました。3 月 10 日、巣鴨でのイベント当日への抱負やワスレナグサに込めた思いなどをうかがい、手渡し式を終了いたしました。

■手渡し式②—磐城農業高校

続いて、磐越道を南下し、磐城農業高校へと向かいました。

途中、恒例の福島ラジオ『Radio de show』に生出演。今年もなすびさんに郡山でのイベントの参加を依頼するとともに、東京でのイベント告知をさせていただきました。

磐城農業高校は、第 1 回目からすべて参加していただいている高校です。新しい校長先生が赴任されたということで、ごあいさつを兼ねてうかがいました。

高校に着いて、車を降りるとすぐに、懐かしい顔を見かけました。一昨年には郡山で、昨年は代々木と郡山で、過去 3 回参加してくれた生徒です。声をかけると、「弟がふたば未来学園高校で参加しますので、よろしく願います！」とのこと。家族の中でも、このイベントのことを話し、引き継いでくれているのを感じ、たいへんうれしくなりました。

すでに福島県内の校長先生のあいだでも、この忘れな草プロジェクトのことは周知されているらしく、今回のことを新しい校長先生にもたいへん喜んでいただいております。

手渡し式では、生徒たちは緊張のせい、声も笑顔もあまり出ないままではありましたが、イベント当日への思いやワスレナグサを育てることなどについて、話してくれました。

その後、温室へ。「私は草花が専門ではないんですが……」とおっしゃりながらも、ワスレナグサの生育の特徴を校長先生がたいへん詳しく教えてくださいました。

3 月のワスレナグサの生育、そして生徒たちとの再会を楽しみに、2 校の手渡し式を終えてまいりました。





第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 巣鴨 Day1

■会津農林高校

2019年忘れな草プロジェクトのトップバッターは、昨年と同じ会津農林高校のみなさん。しかも、昨年仙台で配布をすでに経験した生徒たち。会津から巣鴨は遠いため、前日に上京し、ほのぼの運動協議会のスタッフ数名と懇親を兼ねて食事をいただきました。すっかり打ち解け、前年の経験もあることから、楽しむ余裕があるかな~と思ったのですが、やはり「東京ではもらってもらえないかもしれない」「東京の人は冷たいかもしれない」と不安でいっぱいの子どものまま別れました。

翌朝、巣鴨に到着すると、工事で使えないということだったすがもん広場が空いていました。さっそく、商店街の方へ使わせていただけないかとお願いにいくと、OKが。そこで、これまでと同様すがもん広場で準備をはじめました。会津からの約1,000鉢のワスレナグサを前に、みんなでいっせいに準備に入ると、なかなか壮観です。ふだんは会社の上位職であっても、この日ばかりはみんな同じように地面に座り込んで、いっしょに作業をします。

巣鴨は本当に通行される方々のほうから声をかけてくださいます。最初は緊張気味だった生徒たちも、そんな人々の声に、だんだんと笑顔があふれていきました。次々と声をかけられ、また生徒たちからも声をかけ、どんどんとワスレナグサがもらわれていきます。

15時すぎには、ほとんど配り終え、恒例の乾杯ならぬ「カンタイ」で終了。感想のシェアを行ったあと、生徒たちは帰っていきました。この日も笑顔にあふれた1日になりました。



私たちは今回、東京の巣鴨で行われた忘れな草プロジェクトに参加させてもらいました。東京でのボランティア活動は初めてで、とても貴重な体験をさせて頂きました。

このプロジェクトでは「東日本大震災を忘れないでください。」という思いを込めて全国の人たちに募金活動を行いながら、忘れな草をチャリティ配布しました。最初はあまり声を出すことができず戸惑うばかりでしたが、私たちが育てた忘れな草を受け取ってくれる巣鴨の人たちに応援され、とても嬉しく思いました。一緒に手伝って下さったボランティアの方々にも協力を得て、沢山の人たちと触れ合えたことや話せたことが私の良き経験になったと思います。とても貴重な一日を体験できたこと、多くの方々に支えられて体験ができたことに感謝しています。本当にありがとうございました。

農薬園芸科3年草花専攻班 芳賀 彩花

忘れな草プロジェクトに参加させていただいたのは、今回で2回目でした。前は、仙台駅で配布を行いましたが、今回は東京都の巣鴨で配布を行いました。巣鴨は初めて行く場所だったので、不安もありましたがそれ以上に楽しみでした。巣鴨での配布では、私たちの活動に目を向け、話かけていただいたり、忘れな草を配布した方々に「きれいな花だね」と言っていたりしました。私が一番嬉しかったのは、受け取った忘れな草を見て「この忘れな草から元気ももらおうね。」とってくださったことです。私たちが育てた忘れな草が色々な方々に元気を与えていると知って、今後も私たちが育てた草花で喜んで下さる方々のために頑張ろうと思いました。

このような貴重な体験をさせていただいた、ほのぼの運動協議会の皆様には感謝しています。本当にありがとうございました。

農薬園芸科3年草花専攻班 岩佐 奈宙

今回、2度目の忘れな草プロジェクトに参加して、改めてこのプロジェクトの重要性を考えさせられました。巣鴨の人たちは優しい人ばかりで、震災のことをよく考えてくれている方はたくさんいましたが、ワスレナグサを渡す際に特に関心のない様子の方もいました。だからといってその方たちが何も考えていないかというところではありませんが、「震災があった」「そこでたくさんの方が被害にあった」ということを忘れないでほしいのです。この活動はそういった想いが込められており、とても重要な活動だと私は思います。

震災があった2011年、私は小学3年生でした。私の住んでいる町は高いところにあつたので津波や地震などの被害はあまりなく、その時は自分に被害がないから震災について深く考えていませんでした。ですが、高校3年生になった今、もっと深く考えなければならぬ

と考えています。今、普通の生活ができてることが何に幸せなことかよく考え、毎日を大切に生きていきたいです。ありがとうございました。

農薬園芸科3年草花専攻班 國分 楓雅

私は今回、2回目の忘れな草プロジェクトに参加させてもらい、東京都の巣鴨で募金活動を行いました。午前の10時頃から始まり、午後の2時頃まで私たちは活動していました。私は最初、緊張していましたが巣鴨の人たちは優しく積極的に私たちに話しかけてくださり、私の緊張は解け活動がしっかりできるようになりました。また、プロジェクトの皆さんの手助けのおかげで自分から積極的に声を掛けることができるようになってきました。

このプロジェクトは東北の震災を忘れないでという思いから始まったプロジェクトです。募金活動を行っている中で東北の震災について「がんばってね」や「大変だったね」など東京の人たちの東北への気持ちが伝わってきました。私はこのことに感動し、東日本大震災の出来事を忘れないでほしいと思いました。このプロジェクトに参加して私は、とても貴重な体験をさせてもらい、プロジェクトの皆様にも感謝しています。

次に参加する生徒たちにもこの感謝を忘れない、よい機会にしてほしいと思いました。

お世話になりました。

農薬園芸科3年草花専攻班 小川 京士

『生徒に自信を持つ機会を！』そんな気持ちから2回目の忘れな草プロジェクト参加です。生徒は昨年(仙台)に引き続いての参加なので、ある程度の経験はありましたが、今年(巣鴨)は通行人も多く、少々勝手が違った様子でした。

忘れな草の栽培は、昨年も経験した生徒たちが、昨年以上に多く関わってくれました。

東京(巣鴨)の募金活動では、多くの方々に支えられ、協力して取り組むことができました。

多くの方々にお世話になり、関わりを持ち、一つのことをみんなでやり遂げることができ、生徒たちは大きく成長することができました。

ありがとうございました。

教諭 大竹 寿



第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 巣鴨 Day2

■ふたば未来学園高校

巣鴨の2日目、3月10日は、初参加のふたば未来学園高校でした。福島原発からすぐ近く、そして避難所生活を送っている生徒もいるとのことで、いつもより一層、ピリピリしているように感じられました。実際に、朝礼、そして恒例のえがお体操®でもほとんど笑顔も声もなく、マスクで顔の大部分を覆い、目線は下を向いたまま。「これは、相当、むずかしいかもしれない……」そう思ったボランティアスタッフもいたほどでした。

なにはともあれ、緊張をほぐすためにも、巣鴨地藏通り商店街を歩いてこようということになり、何人かのボランティアが付き添って、とげぬき地藏までぐるっとひとまわり。そこからは、もう巣鴨のペースです。次々と話しかけられ、勇気づけられたり、ほめられたり、涙を流してくれたりとするうちに、みるみる間に笑顔に。マスクもとって、会話を楽しむ姿へと変化していきました。ここまでの変貌ぶりは初めてで、本当にうれしい出来事でした。

最後は、恒例のカンタイと感想会でしたが、ここでもうれしそうな表情が続いていました。この日、巣鴨で出会えた方々と高校生みんなが共有した時間は短いものではありましたがたいへん貴重なものになりました。



私は、農業の授業で、忘れな草プロジェクトとはどのような活動なのかについて知りました。しかし、実際に巣鴨に行ってもほのぼの運動協議会の方から、この忘れな草プロジェクトに対する思いを聞き、忘れな草プロジェクトの大切さを知ることができました。

今まで、福島県双葉郡での復興イベントなどに参加し、自分たちが作ったものを販売する活動をしたことがあったので、忘れな草も多くの人が貰ってくれるだろうと思っていました。しかし、物販とは違って、忘れな草を配ろうと声をかけてもなかなか貰ってくれず、自分が必要として買ってくれる販売とは大きな違いがあることを実感しました。最初は、どんな声を掛けたら良いのかわからず、あまり積極的に声を出せませんでした。それでも忘れな草を受け取ってくれた人たちはすごく優しく、笑顔で「頑張ってね」と声を掛けてくださりすごく元気を貰うことができました。

活動をコツコツと積み重ねることで復興に繋がっていくと思います。これからは身近にこのような活動や地域の人との交流できる場があれば参加したいと思います。ありがとうございました。

大和田日南子

今回忘れな草プロジェクトに参加し、復興を応援してくれる方や実際に震災に遭われた方などいろいろな方に配ることができました。参加する前、私たちが配付する巣鴨はおじいちゃん、おばあちゃんの町と聞いていたので人があまり出歩かないのではないかと、配付する人はいるのかなどいろいろと不安がありました。巣鴨に着くとたくさんの人がおり、若い人も多くいて安心しました。当日の活動は忘れな草の配付と募金でしたが、たくさんの方が募金してくれました。小さい子からおじいちゃんおばあちゃんまで優しく、復興を応援してくれて日本人ってとても良い人なんだなと感じました。私も困っている人がいたら助けられる人間になりたいです。

遠藤綾那

私は、忘れな草プロジェクトに参加する前はちゃんとみんな受け取ってくれるか、自分で福島の現状を説明できるかなど不安がすごくありました。しかし、実際に参加してみると巣鴨の人はみんな優しく、すごく温かい人たちで、募金してくれたり、「頑張ってね」と声を掛けてくれたりしました。

忘れな草プロジェクトを通して震災を忘れず、心にとどめてほしいです。

鈴木優衣

このプロジェクトに参加して、忘れな草の配付や福島から東京までの日帰りでの移動は大変で疲れました。ですが、いろいろな事を学べた貴重な一日だったと思います。巣鴨は高齢者の方が多く、親切な人たちが多く感じました。

最初に巣鴨商店街で忘れな草と募金箱を持って歩いた時にほのぼの運動協議会の方から「笑顔で声を出して」と言われましたが、なかなか思ったようにはできませんでした。街の人たちに呼びかけているうちにだんだん慣れていき、終わる頃には声も出せるようになったので良かったです。

3.11を忘れてほしくないという意味で配付した忘れな草を貰ってくれた人たちには大事に育てて欲しいです。たくさんの人たちに受け取って貰えて良かったです。また、「頑張ってね」と言われたので嬉しい気持ちになりました。このプロジェクトに参加して本当に良かったです。ありがとうございました。

佐藤愛美

私は巣鴨で忘れな草プロジェクトに参加しました。このプロジェクトに参加するまではボランティア活動や募金活動については少し抵抗がありました。実際に参加し、巣鴨で忘れな草を配付していると私たちに応援してくれている人が多いことがわかりました。また、福島県出身の方も多くいることもわかりました。その中には私たちと同じ双葉郡出身の方もいました。

今回の体験を通して、ボランティア活動にもっと参加してみたいと思うようになりました。

室原智泰

忘れな草プロジェクトでは温室で忘れな草を育てることから始まりました。寒さで葉が黒く変色してしまった苗もあり、管理するのが大変でした。その後手渡し式でほのぼの運動協議会の方々とお会いし、私たちが育てた忘れな草を渡すことができました。

3月10日に巣鴨に忘れな草をボランティアの方々と一緒に配った時は、たくさんの人たちに自分たちが育てた忘れな草を手渡すことができ嬉しかったです。配っている時に私たち双葉郡のことを知っている方に励ましてもらったことが印象に残っています。

このプロジェクトに参加することができてよかったです。ありがとうございました。

小林祐稀



第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 代々木公園 Day1

■磐城農業高校

2019年3月16日、代々木公園で開催されたアイルランドのお祭り「アイラブ・アイルランド・フェスティバル」に在日アイルランド商工会議所に今年もブースを提供いただき、出店させていただきました。この日の配布は、磐城農業高校のみなさん。前日にテントを設営し、ワスレナグサも到着。すでに花が咲き始めていました。

磐城のみんなは、とてもユニークで、積極的に通りかかってくる人に話しかけていきます。そのためか、ブースの前に一列になって、通りかかる方に威圧感を与えてしまうことが往々にしてあるのですが、この日はまったくそういうこともなく、公園のあちらこちらに散らばって、見ていて爽快なくらい次から次へとワスレナグサを配布していきます。また、ボランティアスタッフも、それに負けじとばかりに代々木公園のあちらこちらで目立ち、活躍していました。

例年、この日はボランティアの数も少なく、イベントに訪れる人も少ないことから、配布が一番難しいのですが、今年は違いました。おかげで、予定よりだいぶ早い時間に予定数をすべて配布することができました。その後に、何人かご連絡をいただいたのですが、お渡しすることができないほどでした。

この日も最後は恒例のカンタイと感想会。朝から比べると、少し日に焼けたような笑顔で、みんなおいしく鯛焼きをいただきました。



いろんな人と関わってよかった。
たくさんくばれてよかった。

片山 真菜

なかなかできない貴重な体験ができてよかったです。
いろんな人と関わってたのしかったです。

野崎 桃華

楽しかったし、配るのも楽しかった。さむかった。

佐藤 あいり

プロジェクトに参加してみて最初は配るのがとても大変なんだろうなと思っていました。しかし、そんなことはありませんでした。

今回のこのプロジェクトに参加してたくさんのことを学びました。とても良い機会をいただきました。良い日になりました。

太田 綺乃

大勢の方に受け取って頂けて良かったです。
郡山の手渡し会でもがんばります。

松本 桃華

貴重な体験をすることができてよかったです。
たのしかったです!!!

笹嶋 英里

このような貴重な体験をできてとてもよかったです。
たくさんの方が笑顔で受けとってくれてうれしかったです。
ありがとうございます。

荒川 葵

いつもお世話になっております。また、先日は生徒と引率、計8名が大変お世話になりました。

この数年間、送っていただいた苗を3年生が育て、その苗を後輩たちがイベントで配ることが、草花専攻班の引継ぎの儀式となりつつあります。卒業や入試の時期と重なり、負担が大きく感じられますが、先輩と後輩とのつながりや、各自の自覚を促すためにも良い機会をいただいていると思います。震災の記憶を忘れず防災の意識を高く持ち続けるために、郡山での忘れな草プロジェクトも含め、今後ともよろしく願いいたします。

教諭 佐藤 智宏

先日は、手渡し式でのご来校および、忘れな草プロジェクトへのお招きありがとうございました。国際色豊かなアイルランドフェスティバル会場でのワスレナグサ配布は、生徒の自信にもつながったように思われます。文章にはなりませんでしたが、飾りのない率直な感想かと思いい手直しせずに提出いたします。

ボランティアの皆様にも会場内外で大変お世話になりました。ありがとうございました。よろしくお伝えいただければ幸いです。

教諭 磯上 竜





第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 代々木公園 Day2

■岩瀬農業高校

2019年、東京でのワスレナグサ配布イベントの最終日は、代々木公園で岩瀬農業高校が担当してくれました。この日は、アイルランドの大使に舞台上でワスレナグサを手渡すというセレモニーもあり、たいへんな人出で賑わいます。ボランティアも多く、代々木公園が人であふれるといったくらい。岩瀬農業高校も総勢10名で参加してくれました。

岩瀬農業高校のみんなはとても仲が良く、数人のチームになったところにボランティアも加わり、公園のあちこちへと散らばり、どんどん配布していきます。来場されている方からは何年も連続で来て受け取ってくださっている方や前の週巢鴨で受け取ったという方など、うれしい声をたくさん聞くことができました。

この日も配布は順調に進み、セレモニーが始まる前にほとんど配布終了。ブース前に集まっていたところに、アイルランド大使がちょうど通りかかりいっしょに記念撮影をさせていただきました。また、その後のセレモニーでも立派に大役を果たし、みんなとても誇らしげな笑顔でした。最後は恒例のカンタイで終了。

2019年の忘れな草プロジェクト in 東京も、大成功で終えることができました。



忘れな草プロジェクトには今年で2回目の参加となりました。このプロジェクトの内容を生徒に説明し、いざ苗が届くと苗の本数に驚き自信をなくしていました。しかし、生徒たちと苗の栽培を一から行い、成長過程を見ていくことで配布することがいつの間にかに楽しみにかわっていました。

東京の代々木と福島県の郡山でワスレナグサを配布させていただきました。東日本大震災を忘れてほしくない、また、この震災で支援して下さった多くの方に感謝の気持ちをこめてメッセージカードも同封して配布しました。生徒たちは緊張して声が小さく、行動も積極的ではなかったのですが、もらってくれる人たちがたくさんいることや励ましの言葉をいただくことで自信がついていました。今回の活動で少しながらも生徒の成長を感じることができました。

忘れな草プロジェクトに参加させていただき本当にありがとうございました。

教諭 鈴木 貴英

私はこの忘れな草プロジェクトの活動を通して、全国で安全を願っているのだと思いました。東京、福島でこの活動を行いました、どちらの地域でも、みなさん震災について様々な気持ちを抱いていたと思います。2011年の3月11日にたくさんの人や大切なものが失われてしまったはずですが、そんな日本を数年かけて復興をとげ今この地を強く生きている人がたくさんいることをこのプロジェクトを共に実行した人たちが苗をもらってくれた人から教わることができました。この地を生きている人たちによってこの国は強く作られているのだと学べました。

このことを忘れずに伝えていければより日本は強くなれると思いました。

石口 開人

今回の忘れな草プロジェクトに参加して、多くの事を体験することができました。自分たちで育てた忘れな草を多くの人たちに受け取ってもらい、震災や福島のことを忘れないでもらいたいという気持ちで活動できたのでとても良い経験になりました。今後はこの経験を生かして生活をしていきたいです。

熊谷 洸介

忘れな草プロジェクトに参加して、いまだに多くの方が震災について心を痛めて悲しんでいることを改めて感じました。今回は学校を通してこの活動を知り自らの意志で参加しました。この活動を行っているほのぼの運動協議会のみなさんもとても明るく接しやすく初めてなのにとても楽しく活動できました。今回は、代表としてアイルランド大使に忘れな草を渡すという大役を任されてドキドキしましたが、多くの方から褒められとてもうれしかったです。

高校生でもそうでなくても、このプロジェクトに参加して震災について風化させないように頑張る活動を広め、参加してくれる人を増やして、どんどん活動の幅が広がっていけばいいなと思います。

小沼 拓海

今回の忘れな草プロジェクトを通して、人と人のつながりを感じることができました。この経験を生かし、残りの学校生活を過ごしていきたいです。

鈴木 竜之助

東京と郡山で忘れな草プロジェクトに参加し、私は人の心の優しさを感じました。忘れな草を配っていると「復興活動頑張ってるね！応援してるよ！」と多くの方に言ってもらえました。また、SNSなどで忘れな草プロジェ

クトの活動を広めてくれている方々もいてとても嬉しかったです。

ボランティアスタッフの皆さんとほのぼの運動協議会の皆さん、今回は貴重な体験をさせていただき誠にありがとうございました。

渡辺 琢斗

私は、この忘れな草プロジェクトを通して震災について改めて考えることができました。震災から8年という月日が流れた今でも、復興の進んでいない場所が数多くあります。少しでも早く、自分の地元へ帰れることを願います。東京と郡山に忘れな草を配りに行き、配った時に何人かの人に「これ、去年ももらったよ」と言ってもらい嬉しくなりました。福島を早く復興したいと思っている人は少なからずいるので、私は福島市民としてとても嬉しく思います。

今回、ほのぼの運動協議会の皆さんと一緒にプロジェクトに参加することができ、本当に良い経験ができました。ありがとうございました。

角田 沙輝

私は、忘れな草プロジェクトを通して、人の温かさを感じる事ができました。私たちが育てた忘れな草と一つ一つ想いをこめて作成したメッセージカードと一緒に配布しました。すると、たくさんの方が足を止めて、私たちの話を聞いてくださいました。とても、嬉しかったです。

忘れな草プロジェクトに参加することができ、貴重な体験になりました。本当にありがとうございました。

相楽 美咲

みんなで育てた忘れな草を様々な人に渡すことができました。忘れな草の花言葉は「私を忘れないで」、英語では「forgetmenot」です。この意味を東日本大震災のことをいつまでも忘れないでほしいという思いと重ね合わせました。日本人の方だけではなく、外国の方にも震災を忘れないでほしいという願いを込めながら活動することができました。

様々な人と交流ができるということは、そんなにありません。今回、参加してみて良かったと思いました。ありがとうございました。

佐久間 芽以



第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 郡山

■磐城農業高校・岩瀬農業高校

3回目となる忘れな草プロジェクト in 東北。今年は、2019年4月14日の日曜日に郡山のショッピングモールフェスタで行いました。昨年と同様、配布を担当してくれたのは、磐城農業高校と岩瀬農業高校。そして、福島出身のタレントなすびさんが今回も特別ゲストとして参加してくれました。

両高校が持ってきてくれたワスレナグサは、3月のときとは比べ物にならないほど成長しており、びよびよんと茎を伸ばし、花が咲き乱れています。大きな会議室で、みんなで力を合わせ、準備に取り掛かりました。

東北でのプロジェクトリーダー・株式会社シャポンドウの石本さんのあいさつ、なすびさんからの呼びかけを舞台上から行い、配布スタート。はじまると同時になすびさんの前には長い列ができ、握手をしたり、写真撮影に応じたりとしながら、どんどんと配っていかれます。それに負けじと、さすが、代々木公園ですでに経験済みの両校の生徒たち、みんなあちらこちらに散らばり積極的に活動していました。ときには、なすびさんと写真を撮りたいという方のカメラマンの役もこなすなど、大活躍です。

この日の配布予定数は600鉢。ちょっとたいへんかなという思いもあったのですが、なかには地域の花壇に植えたいということでまとめていただいていた方がいたりで、結局は予定より大幅に早くに配布終了してしまいました。また募金額も過去の郡山での最高金額が集まり、たいへん充実したイベントとなりました。

最後に、みんなでケンタッキーフライドチキンをいただきながら、感想会を行いました。このイベントが高校生にとっても、そして私たちボランティアにとっても貴重な経験であり、成長の機会であることを感じながら、2019年の忘れな草プロジェクトを終了いたしました。



第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 番外編



■南三陸

支援団体の園芸療法研修会、東北視察のアテンドをしてくれたSOLAの平田さんのご縁で、宮城県南三陸町の佐藤良夫さんへワスレナグサをお送りしました。4月19日、磐城農業高校から南三陸に届いたワスレナグサ。佐藤さんが震災後、南三陸に新しい名所をということで代表となって整備した北の恋人岬、復興住宅2箇所、そして佐藤さんご自身が住まわれているところの4箇所に植えたそうです。



そのひとつ、西ヶ丘復興住宅（上記写真の一番右）では、住宅のみなさんが毎日水やりをしたり、草取りをしたりして大切に育ててくださっているそうです。住宅の皆さんが足を止めて眺めては、元気が出る、癒されると喜ばれていらっしゃるとのこと。

また、北の恋人岬（上記写真の左3点）では、「ワスレナグサってかわいいですね」など、訪れるみなさんに笑顔と元気を届けているそうです。機会があれば、ぜひとも南三陸町志津川区袖浜地区の恋人岬で、健気に咲き、人々を笑顔にするワスレナグサを見に行ってみてください。ここで日の出を見ると、そのカップルはうまくいくという言い伝えもあるそうですよ♪

■店舗

また、今年は初の試みとして、おめで鯛焼き本舗高崎並榎店と夢ある街のたいやき屋さん The Peanuts 与野店の店頭でも配布いたしました。

お客さまをはじめ、道行く多くの方々に関心を持っていただくことができ、与野店では20,000円近くの募金も集まったとのこと。来年もぜひ実施したいと思います。希望店舗はほのぼの運動事務局までご連絡ください。（写真は与野店店頭での様子）





第6回

忘れな草プロジェクト — 笑顔の絆をつなごう — 番外編 2

岩瀬農業高校でFFJ（日本学校農業クラブ）の大会に出場するための意見発表大会が行われた際、「忘れな草プロジェクト」に参加した生徒の発表があったそうです。たいへん興味深いということで、岩瀬農業高校の渡辺譲治校長先生よりお送りいただきました。今回、特別にその原稿を掲載させていただきます。

復興に向けての活動 [ワスレナグサプロジェクトに参加して]

小沼 拓海

あの東日本大震災から8年という月日が流れました。これほどの月日が流れても、ほとんどの地域で復興が進んでいません。原子力発電所付近はもちろん、避難指定区域に指定されている多くの場所がいまだに多く見られます。8年たった今でも多くの方が自分の家や住んでいた地域に帰れずに仮設住宅で過ごす日々を送っている人もいます。まだ福島は復興途中だということを忘れないで下さい。そして、このことを忘れないようにするためにヒューマンサービス科では昨年からのワスレナグサプロジェクトというプロジェクトに参加しています。ワスレナグサプロジェクトでは、震災を忘れないでという気持ちを込めながらいろいろな方に自分たちで育てたワスレナグサをお渡しし、募金活動も並行して行っていたので募金も少しずつ頂きました。

私は、三月十七日に東京の代々木公園で四月十四日は郡山の日和田でのワスレナグサプロジェクトに参加してきました。東京で活動を行ったときに代々木公園ではアイルランドフェスティバルが開催されていました。このプロジェクトを支援していただいているアイルランドの大使なども参加されていて、その影響もありとても多くの外国人の方々に受け取っていただくことが出来ました。

そして、私たちが代表として大使にワスレナグサを直接お渡しして「この活動はとても素晴らしい活動だからこれからも頑張る」とお言葉をいただき、握手させて

いただきました。

その後海外から来られた人たちに、

「これはいったい何の活動なの？」

などの質問を頂きました。その質問に対し英語で書かれたボードを持ちながら、これは今から8年前福島県で起きた東日本大震災や、原子力発電所の爆発という大きな災害をいつまでも忘れないで欲しいという願いを込めて私達福島県の高中生で一から鉢上げ、水やりなどをし、人に渡せる状態までクラス全員で育てたワスレナグサをお配りし、私たちはさらにオリジナルとして、自分たちのクラス皆で作ったメッセージカードを同封しました。その甲斐あってか、メッセージカードを見た方々にツイッターなどいろんな媒体を使って、この活動について告知していただき、様々な方にこの活動を知っていただけました。

このワスレナグサの花言葉には、私を忘れないで、真実の友情という意味があります。

今ここにいる人はみんな震災の被害にあっても亡くならず生き延びた人達です。中には避難区域からこの区域に家族で引っ越した又は、避難してきた人や、自分の家族や大切な人を震災や原爆の事故によって無くしてしまった人もいらっしゃると思います。

私も曾祖父が入院していた病院が半壊してしまい病气の人に繋いでいた輸血や電子機器などが倒れてしまい多くの患者さんが亡くなってしまいました。

私の曾祖父自体も薬を投与していた機械が倒れて使えなくなってしまう、100歳を超えていたこともあり、病気が悪化してしまいました。

震災から一年がたち曾祖父は福島県で一番長く生きている男性として県からの表彰を受け新聞にも大きく載せていただきました。しかし震災の時に悪化した病気が原因でその表彰を受けた約半年後亡くなってしまいました。

戦争なども体験していた曾祖父なのでいろんな話を聞くのがとっても楽しみでした。余命宣告をされていて判ってはいたことではありますがとても悲しかったです。

ワスレナグサの花言葉の「私を忘れないで」

この活動でワスレナグサを配る理由にはもちろん震災を忘れないでという意味が大きいと思います。しかし、私はそれに加えて、この震災で亡くなってしまった人たち、さらに原爆の事故に巻き込まれてしまった人たち、

さらには今でも復興の終わっていない地域も多く、避難所生活の人がいること、まだ汚染物質が多く残っている所があるのを忘れないで欲しいという思いもこもっているのではないかと考えています。

私たちは、震災によって色々な物を失ってしまいました。住む場所や職場さらには放射線の影響で農作物の新鮮さの信用そして、人の命、失ったものは確かにとても大きいものだと思います。ですがそのことをきっかけに分かったこと気付いたことも多くあると思います。例えば、いつも身近にいる友達や家族、いつも当たり前のように食べているご飯や、当たり前のように使っている電気や水道など、一度失ったからわかる大切さ、食べるものが少なくなったからわかるありがたみ、そして命を守るための避難訓練の大切さを学ぶことができたと思います。

これからの生活で心の隅にでもいいので震災について亡くなった人について忘れないでいてください。

第6回 忘れな草プロジェクト 2019 –笑顔の絆をつなごう– 収支報告

収入金額	
募金、寄附等	1,572,182
ほのぼの運動	690,335
合計	2,262,517

被災地の活動支援金および寄附金	
ワスレナグサ栽培費	498,324
旅費・交通費	799,466
寄附金(4高校各100,000円ずつ)	400,000
被災地支援費合計	1,697,790

その他の経費	
包装資材、販促物作成費	531,927
その他雑費	32,800
合計	564,727

支出金額合計(被災地の活動支援金、寄附金、その他の経費)	2,262,517
差引(募金、寄附等から被災地支援金、その他忘れな草プロジェクトの経費を引いた差額はほのぼの運動から支出)	0

【特別協力】

株式会社ジェーシー・コムサさま
 株式会社ポポラマーさま
 株式会社シャボンどゥさま
 日東富士製粉株式会社さま
 東京山王ロータリークラブさま
 有限会社メディア・サーカスさま
 株式会社アーミップさま
 ジュリエッタガーデンさま
 サワダミドリさま
 カタヤマケンジさま
 AITAI プロジェクトさま
 募金いただいたすべてのみなさま

【スペシャルサンクス】

アイルランド大使館、在日アイルランド商工会議所
 巢鴨地藏通り商店街振興組合
 原宿表参道櫛会
 株式会社京王プレッソイン
 農事法人組合チバナーセリー
 NPO法人日本園芸療法研修会

【後援】

東京都倫理法人会社会貢献委員会

域学交流事業

八雲町 × 上智大学 ほのぼの運動

ほのぼの運動協議会の独自の活動として行政・大学とともに地方創生を目指す「域学交流事業」。本来は2018年9月に北海道二海郡八雲町へ上智大学の学生とともに訪問し、開催する予定でしたが、北海道胆振東部地震の影響で2019年2月に延期、開催いたしました。

今回は、現地での研修に先立って2019年1月31日（木）に上智大学で事前学習を行いました。

SDGsパートナーズの田瀬和夫CEOを講師に迎え、現地で考えるべきポイント、課題を学習。具体的なテーマをもって現地へ入りました。真冬の2月ということで、これまでと違うプログラム、寒さ対策も万全に臨んだ第3回域学交流事業。その模様を、時系列に沿ってお届けいたします。

事前学習

2019年1月31日に上智大学で行った事前学習は、八雲町からの「ふるさと納税について新たな視点がほしい」という要望に応えるため、そもそもふるさと納税とはどういうものか、八雲町ではこれまでどのようなふるさと納税を行ってきたかなど、その現状、今後の展開、そして課題などについて学習しました。SDGsパートナーズの田瀬和夫CEOを講師に迎え、今回参加予定の上智大学の学生、ほのぼの運動協議会担当理事、事務局スタッフなどで勉強いたしました。

現在、八雲町では、ふるさと納税で集まった寄附金の3割を税収に、3割は海産物や酪農品などを使用した返礼品に、そして4割が物流にかかる経費となっています。2030年まで続けられるといわれているこのふるさと納税について後日現地での研修を経て、提案をすることになりました。



第1日目

2月20日、朝に羽田を出発し、お昼少し前に函館空港に到着。2月ということで、極寒を想像していたのですが、「例年になくあたたかい」ということで、多少拍子抜けするほどでした。函館から八雲町へバスで移動後、ハーバスター八雲で昼食をとりました。いつもは青々とした芝が広がる景色も、一面の雪景色。集合写真ではみなさん少し身が縮こまっていました。

プログラム① 漁業見学および生産者の方からのレクチャー

太平洋と日本海に面した渡島半島の中央を占める八雲町では、ホタテ、ホッキ、サケ、カレイ等が水揚げされます。今回は、特に主力であるホタテ貝についてレクチャーを受けました。八雲のホタテは、耳吊りと呼ばれる養殖で行われているため、砂噛みがないので「砂出し」が不要です。さらに八雲の恵まれた気候風土のおかげで、ぶりっとした食感と甘みが強いのが特徴です。

この日はホタテの殻取りの実習を行い、その場で試食を行い、その食感を体感いたしました。



プログラム② 酪農施設見学およびレクチャー

続いて、株式会社学林ファームで酪農施設見学およびレクチャーを行いました。学林ファームは、渡島檜山管内で初めての大型フリーストール牛舎（牛が自由に歩き回ることのできる牛舎）で、搾乳ロボット6台を導入、環境に配慮したバイオガスプラントもあるメガロボットファームです。

一昨年におうかがいした際には、まだ全面稼働はしておらず、がらんとした状態でしたので、稼働している状態では今回が初訪問になりました。ここでは、その先進的な取り組みから、研修生、新規就農希望者を積極的に受け入れ、緑（草）と牛と大地（土作り）にこだわった良質の生乳生産と将来の八雲町酪農を担う人材育成を目指しているとのことでした。実際に稼働しているファームを見ることで、その重要性を知ることができました。



第2日目

2日目は、朝食の後、はぴあ八雲でSDGsパートナーズの田瀬和夫CEOによる講義からスタート。八雲町の岩村町長が持続可能な町づくりに取り組もうとした際、パートナーとなったのが田瀬さんでした。その後の八雲町は地熱発電などの再生可能エネルギーの開発に独自で取り組んできました。

田瀬さんの講義では、まず地方自治体による地方創生の成功例、そして問題点が明らかされました。次に、SDGsについての説明、今後の展望などについてお話いただき、その後、グループディスカッションを行いました。事前学習により、何をテーマにこの日を迎えればいいのか、各自予習も行ってきたため、たいへん活発な議論ができました。



プログラム③ もちつき体験・試食

昼食を兼ねて、もちつき体験、そして試食をしました。杵を持つ手が、多少あぶなっかしいところもありましたが、地元の方々の協力もあって、おいしいお餅をつくことができました。

プログラム④ 雪とのふれあい

続いては、冬ならではのプログラム、雪とのふれあいです。ハーベスター八雲に戻り、雪に覆われた、ふだんは緑いっぱいの丘をソリすべりをしたり、雪の上に寝転んで、ぐるぐるぐるぐる回転したり。そうして雪になじんだところで、メインイベント「かまくらづくり」を行いました。

つくるのは、高さ2メートル、横2メートルのくま型かまくら。準備してある雪山をもとに、イメージ図にしたがって、雪を形づくり、固めていきます。とても苦勞するかと思いきや、1時間ほどで、ほぼほぼ完成！ しゃがめば2人が隠れるくらいのかまくらができました。都会では味わうことのできない体験ができました。

プログラム⑤ 郷土資料館でレクチャー

その後、郷土資料館で八雲町の歴史を学びました。日本海側の旧熊石町側を熊石地区、太平洋側の旧八雲町側を八雲地域といいます。八雲町郷土資料館は主に八雲地域の自然・文化・歴史を中心に資料展示、収蔵がされています。

その後、隣接されている木彫り熊資料館へ。1924年に開催された第1回八雲農村美術工芸品評会に北海道で最初に作られた熊の木彫りが出品されたといわれていますが、木彫り熊は、冬期の収入源として1923年から作られはじめました。八雲の熊の木彫りは昭和初期には年間5,000体が生産されるほど人気がありましたが、次第に人気が衰え、現在では生産者は1名のみ。一方で、コレクターが登場しはじめているなど、これからの行方が注目されます。



第3日目

3日目は、再びはぴあ八雲でワークショップです。前日のワークショップと、これまでの漁業や酪農のレクチャーを踏まえた研究発表をグループと個人とで行いました。

これまでとは違い、事前学習をし、学生たちもそれぞれ調べ物などをしてからの現地研修だったからか、非常に奥深い意見がいろいろと出てきました。グループ発表に加え、個人発表があったことから、エネルギーについて考える学生、観光について考える学生、酪農など専門性の追及について考える学生など、より幅広いテーマについても話し合うことができました。また、みなさんのプレゼンテーションもとても素晴らしいものでした。今回は冬の開催だったことから、夏にも来てみて違う季節を体験したいという声もありました。

真冬の開催で、多少心配はあったものの、無事に全プログラムを終えることができました。最後に少しでも観光をして第3回域学交流を終了いたしました。



今後は域学交流事業はジェーシー・コムサの主催となり、ほのぼのの運動は後援として参加することになりますが、八雲町、上智大学と連携をして、地方創生に取り組んでまいります。

ほのぼの運動 店舗紹介

ほのぼの運動を日々の営業活動や特別なイベントなどで表現している店舗のみなさん。

今回はその中から、夢ある街のたいやき屋さん 若松町店、おめで鯛焼き本舗 湘南台駅前店、そして直営店でのほのぼの運動への思いや取り組みについてご紹介いたします。



夢ある街のたいやき屋さん 若松町店

住 所	神奈川県茅ヶ崎市若松町 2-27
電 話	0467-84-1883
営業時間	月曜～日曜 10:00～18:00
オープン日	2009年11月
経 営	社会福祉法人 翔の会

夢ある街のたいやき屋さん 若松町店の吉田店長にほのぼの活動についてうかがいました。同店はほのぼの活動に非常に熱心で、イベント出店や学童への差し入れなどに加え、子どものたい焼き体験を年に1回は開催しているそうです。「子どもたい焼き体験は、お客さまからの要望があり、こちらの体制も可能であればいつでも開催します」と吉田店長。内容は、つぶあんを2匹焼いてもらい、それを箱に詰めてお渡しするところまで。参加費は1人500円で、日曜日がお客さまの出足が遅いことから、営業開始前の9時くらいから多少営業時間にずれ込む10時30分ころまでの時間で実施されているそうです。なかには、常連の子どももいて、すでに1人で焼くことができるほどだとか。

また、若松町店は、就業継続支援A型事業所という、障害などにより就職が困難な方と雇用契約を結び、最低賃金を保証して働いてもらうことを目的として建てられたお店です。そのため、障害のある方が6名在籍し、うち常時1～3名とスタッフが1～3名という体制で営業されています。

ここで経験を積んでから一般企業へ就職したり、ここで働きながら生活リズムを整えつつ、アルバイトのようにお金を稼ぎながら就職活動をしたりと、さまざまな目的で利用されています。



若松町店 吉田店長

「うまく仕事にはまれば貴重な戦力になります。オープン（2009年）からずっと働いていくれているあるスタッフは、本当にまじめです。仕事を楽しそうにするというのはなかなか難しいことだと思うけれど、彼は単純に仕事を楽しんでいて、仕事が好きでしょうがない。彼がいるとお店全体の雰囲気もよくなり、ムードメーカーとして、みんなに親しまれています」とのことです。

そんな吉田店長にこれからのことをうかがうと、まだ、障害のある方の焼き手がないので育てたいとの答え。最終的には、スタッフはいざという時のために控えている程度で、利用者の方だけでお店がまわるようにするのが理想だと言います。

「障害のある方は事故があった場合、それが一生の心の傷になってしまう可能性が健常者より高い。だから、つつい厳しい目になってしまうんです。また、万が一食中毒や何かでお店が成り立たなくなった場合、障害者の方の働く場を奪ってしまうことにもなりかねない。立っただけでお金がもらえていいなというような心無い言葉を実際に言われたこともあるので。そういったトラブルを防ぐためにも、つついハードルを自分達で高くしてしまい、守りに入ってしまったところがあるんです」

そういった心配がある一方で、「でも、このお店が成功例としてテレビや何かに出たら、画面の向こうにいる障害のある方にも希望をあげられる。障害があっても働くことができる、生活を成り立たせることができるようになるんだという夢を与えられたらいいと思うんです。こういった場がもっとふえたら、もっと活躍できる場がふえる。そんなきっかけになれるようがんばります」と力強く語ってくれました。これからも応援していきたいと思います。



おめで鯛焼き本舗 湘南台駅前店

住所	藤沢市湘南台湘南台フードビレッジ 1F
電話	0466-45-1131
営業時間	10:00 ~ 22:00
経営	株式会社フクシマ商事

おめで鯛焼き本舗湘南台駅前店では入社6年目の青野店長にお話をうかがいました。青野店長は、大学時代にフクシマ商事のサーティーワンアイスクリーム（以降、31）のアルバイトをしていたところ、当時店長だった鳥さんに声をかけられ、就職。たい焼き店に配属になったそうです。

「鳥さんはよく気にかけてくれて、とてもめんどろみがいい上司です」とのこと。鳥さんからも、どこの店長にお話をうかがうのがいいかと聞いたら「青野をお願いします」と即答。お互いの信頼の厚さを感じられます。

青野店長に31との違いを聞いたところ、「31はお客さまの注文を受けて、アイスを盛り、お会計をするまでずっと1人ですが、たい焼きは違います。焼き手と会計は別だし、仕込みもある。ほかのスタッフや、流れ、まわりをよく見る必要があります。それがうまくまわるとすごくうれしい」とチームワークを大切にされています。

今後の抱負についてうかがうと、「爆発的な売上を上げられるようなイベントをしたいです。それと、お店のスタッフ全員で目標を共有して、みんなで一丸となってそこに向かっていく。そういっ

たチームにしたいです。そうして達成できたら、みんなで喜びを分かち合えるようになればいいですね」とのこと。まだ若い青野店長による今後の働く仲間づくりに期待です。

直営店のほのぼのへの取り組みについて、田嶋S Vと浜谷S Vとお話をうかがいました。

直営では、戸越銀座では継続して地域の中学校の仕事体験受け入れ、支援先である東京シューレの仕事体験の受け入れを行っています。また「新しく店長になった大庭と対話をしながら地域へ情報を発信



湘南台店 青野店長

できるようなコミュニティーボードを設置しようかという話になっています」とのこと。うまくコミュニケーションをとりながら、店長からそういった意見が出てくるようにしているそうです。

また、ほのぼのの活動がなかなか難しいショッピングモールやサービスエリアなどでは、ゴミ拾いイベントなどに積極的に参加することで、まわりの店舗とのいい絆を築いているそうです。

一方で、直営店の店長同士ということでは、同じたい焼き事業部で働く仲間意識がとても強いそうです。

「店長たちで集まってゴルフをやったり、家族もいっしょに集まってバーベキューをしたり、フットサルをやったりしてコミュニケーションは深めています。また、店長会議のあとは、2カ月に1回、飲みニケーションをしています。そういったことが働くモチベーションにもなっています」とのこと。お互いたいへんなことなども話し合っ、分かち合っているのですね。

プライベートでも仕事でも励ましあい、支えあい、高めあえる仲間とのことでした。直営だけでなく、ぜひFCも参加して行く機会があったらいいですね。

■ほのぼのの活動をしてみたいという店舗さまへ

たとえば、地域の学童や老人会へたい焼きを差し入れしてみるのはいかがでしょうか。手順としては、次のようになります。

- ①どんな団体が店舗の近くにあるか、インターネットや役所の掲示板などで調べる
- ②興味がある団体、たい焼きを提供してもいいなと思う団体があったら電話もしくは訪問して、たい焼き屋であること、社会貢献活動の一環で地域で活躍されている団体などにたい焼きの提供をしていることをお伝えする。(その際、ニュースレターやウェブサイトをお見せして、ほのぼのの運動や過去の実績などをあわせてお伝えすると、ご理解いただきやすいかもしれません)
- ③何かきっかけとなるイベントなどがあれば、そのときにたい焼きをお届けするお約束をする。
- ④連絡を密に取り、当日の個数や場所、時間などを確認する。(商品内容などは、あくまでも提供する店舗マターで選定してかまいません)
- ⑤お届けにあがる。

その際、可能であれば写真を撮影してください。その写真と申請書を事務局へ提出いただければ、ほのぼのの活動として、後日半額をお返しいたします。また、SNSなどで情報発信をいたします。はじめは少し難しいかもしれませんが、ぜひ、チャレンジしてみてください！

第8期 ほのぼの運動協議会 事業年間スケジュール (案)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
店舗の地域活動	随時受付・実行											
物資支援	随時受付・実行											
寄附事業				寄附先 確定	発表	寄附						ips寄附
忘れな草プロジェクト	郡山	交渉	交渉				栽培開始	種発注	出荷	調整	手渡し式	7,8,15
域学交流事業												
JCコムサ主催 ゴルフコンペ							24日 (木)					
ほのぼの フォーラム					23日 (金)							
理事会			理事会 総会				上期決算				予算案	
WEB広報	随時更新											
ニュースレター					発行							発行
店舗サポート	随 時											
経 理	基本的に事務局が経理業務を行い、 毎月10日までに新宿総合会計事務所に提出、20日までに会計士と打ち合わせを実行											

【編集後記】

先日、久しぶりの友人たちと食事で気づいたことがある。

「うわー、まさか今日会えると思ってなかったから嬉しい！」

「ほんとねー！ Facebookがあるからなんだか久しぶりって気がしないけど、元気だったー？」

と、ここまではよい。問題はその後。

「最近ね、わたし〇〇が痛くて」と一人始めると、「え？ わたしもなのよ」とか「わたしはここ」、挙句の果てには「人間ドックにいったる??？」と、せっかくの食事会なのに、のっけから身体の異変についての話。

出逢った頃はこんな話ひとつもしなかったのに。まさかわたしにもこんな日が来るとは思ってもいなかった。

この夏、与野店ができたころにベビーカーに乗っていた双子ちゃんがアルバイトとしてやってきた。親子揃って「よろしくお願ひします」と。小さいころは、あどけなくて可愛かった二人も思春期を迎えるころから、挨拶もクールな感じで、もう私たちのことなど覚えてないのかな？ と思っていたのに、その二人が……。

話してみると、「この鯛焼きはダントツだ」とか「ここはみんな元気で明るいから楽しい」とか、表情から見受けられない言葉を発する。そして、仕事をさせてみると覚えるのが早いこと早いこと！ 手際がいいし、よく動く。双子たちは成長真っ只中で上昇気流に乗るべく進んでいるのだ。

それに比べて、同じ15年を過ごしているのに、わたしったら……。確かにシニア世代にむかって進んでいるけど、だからといって「痛いところの自慢話」をする必要はない。ひとつでいいから彼女たちを超えたいと思う今日この頃なのである。

事務局長 作間 由美子

ほのぼの News Letter No.13

発行日：2019年8月31日

発行：一般社団法人ほのぼの運動協議会

編集・制作：ほのぼの運動協議会 事務局

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 1-15-1 A-PLACE 恵比寿南 2 F

03-5722-1070 (電話) 03-5722-7396 (FAX)

問い合わせ：jimukyoku@honobono-undo.org